

# 三田村家蔵『天守図』について

吉 田 純 一

## Castle Tower Drawings owned by Mitamura Clan

Junichi YOSHIDA

This paper investigates the drawings of the castle tower which are owned by Mr. Mitamura living in Takefu City.

I think these drawings were the reference data for the construction of the Sabae castle at eleventh year of Tenpo(1840) in the Edo period.

The castle tower on these drawings has fourfold roofs but has five stories inside. Its form is similar to the castle tower of Fukui castle which was founded by Hideyasu Yuki who was a first feudal lord of the Fukui clan at the Keitoku period(1601~06). That follows in other castle towers which were built in the early seventeenth century.

### 1. はじめに

3カ月ほど前、武生市の三田村久治家(神明町4-8)から天守の図面が発見された。今も建設業を営んでいる三田村家は、古くからの宮大工の家柄で、3代目の惣右衛門(直好)は、鯖江の真宗誠照寺派本山、誠照寺の鐘楼(弘化3年,1846)を作っている(注1)。こうした家柄を示すように、同家には大工関係の古文書が多数残されている。この『天守図』はその中から偶然見つかった。

図には表題がなく、どこを天守を描いたものか明らかでない。しかし「天保十二丑七月中旬」と記されている年紀が、鯖江藩主8代の間部詮勝が幕府から築城の許可を得た天保11年(1840)に近いことや三田村家という地元の有力な大工家に伝わってきたことなどから、この図を鯖江城の天守図とみる意見もある(注2)。

本稿はこの図にみられる天守の建築的形態について考察し、さらに松平宗紀氏蔵『福井城天守図』(松平文庫・福井県立図書館保管)と比較・検討しながら、三田村家蔵『天守図』のもつ意義を明らかにしたい。

## 2. 図の概要

発見された『天守図』は図-1・2に示すように2枚からなる。図-1に「つま」、図-2に「平」とあるが、これは初層や最上層の屋根の妻側、平側にそれぞれ対応している。つまりこの2枚の図は、1つの天守の直交する2側面を描いたものである。このことは2つの図の描きかたや内容からも明らかである。以下、図-1を妻図、図-2を平図と呼ぶことにする。

なお両図は天守の側面(立面)を示しているが、屋根の破風の部分や軒先の部分には、本来、外からは見えない虹梁や束などの部材が描かれている。したがって厳密な意味での立面図ではなく、部分的に断面図も兼ねたものになっているが、中・近世の立面図は通例このような表現をとって、「建(立)地割」と称していた。妻図、平図ともに薄手の和紙を使用し、大きさはたて39センチメートル、よこ31.5センチメートルである。図に書き込まれている実際の寸法と図の長さを対比させると縮尺はほぼ100分の1になる。

両図には前述した年紀のほかに、「板邑惣右衛門」と「高拾五間 是(尺)拾丈五尺(也)」の記述も共通にみられる。前者の「板邑惣右衛門」はこの図の筆者と考えられる。板邑(村)という名字については不詳であるが、「いたむら」は現姓の三田村と音が似通っている。そして惣右衛門という名前は三田村家の歴代の当主が名乗っていることから、この「板邑惣右衛門」を三田村家の者とみなすことができよう。年代からみると、前記の誠照寺鐘楼を手掛けた3代目の直好にあてることが可能である。いっぽう後者の記述は天守の高さを示すものであろう。1間=7尺として換算していることや後述するように各層の高さの総計と一致しないことなど、この記述については疑問も残るが、これによると高さは約31.8メートルになる。

このほかにも多くの書き込みがみられるが、「桁下<sup>ノ</sup>石寄臺上まで式丈四尺五寸」(一層目)、「桁上<sup>ノ</sup>桁下迄式丈四尺五寸」(二層目)などのように各層の高さを示すもの、「高はい七寸五分」、「七寸高配」など屋根の勾配を示すもの、「本桁<sup>ノ</sup>出桁まで三尺」のように軒の長さを示すものなどである。これらの寸法と平面の基準となる柱間寸法があれば、建物のおおよその形態は決まってしまう。

## 3. 天守の建築的形態

### 1) 屋根の構成

この天守は四重の屋根に、小さな入母屋の破風や唐破風をつけ、きわめて装飾に富む外観を見せている。最下層の一重目は大きな入母屋屋根で、二重目は同じような入母屋屋根を直交して乗せている。また三重目の屋根は回縁の下にみられる寄棟屋根で、両端に鯪(しゃち)を飾る最上層の入母屋屋根が四重目になる。そして一重目の平側に2つの小さい入母屋の破風(平図)を付け、二重目の平側には上下2段に重なる3つの入母屋破風(妻図)を飾り、最上階には唐破風(平図)がみられる。

これらの屋根は白地のままで特別な表現はみられないが、他の天守のように恐らく瓦葺であっ

たであろう(注3)。そうすれば隅棟や降り棟なども付き、図にみられるよりもはるかに重厚な屋根が想定される。また三角形の破風部分は、前述したように、外に現れてこない虹梁や束などが描かれていたり、白地のままになっているが、四重目や二重目の右下の破風のように、懸魚がつき、格子(狐格子)がはめ込まれていたと考えられる。

## 2) 外壁の構成

天守の外壁には防禦用の狭間(鉄砲狭間、矢狭間)や石落などの装置が設けられるのが普通で、防火のために全面土で塗り込めてしまい、木部を外に出さない例も多い。この図は外壁の表現が十分でなく、詳細な仕様はわからない。ただし最上階だけはすべての柱を二重線で示し、内法長押や貫も書かれている上、周囲には回縁もみられる。天守は大きな櫓の上に物見用の望楼部を乗せて成立したといわれ、初期のものは最上階だけ住宅風の意匠をとり、外部に柱や長押などをそのまま見せ、物見のための回縁をもつ例が多い。この天守もこうした初期天守の形態的特徴を備えている。

一層目と二層目はともに両端の柱だけ二重線で、それらの内側の柱は単線で示されている。そして三層目は両端の柱が見られるだけで、内側の柱は描かれていない。こうした表現が単なる省略によるものか、外壁の仕様の違いを示すものなのかは判断できない。

## 3) 内部の階数

この図はおもに天守の外観の姿を描いたものであり、内部の様子はほとんどわからない。妻図で「桁下<sup>ノ</sup>石寄臺上まで貳丈四尺壹寸」とある部分が一層、その上の「桁上<sup>ノ</sup>桁下迄壹丈四尺五寸」が二層、さらにその上の「桁上迄壹丈四尺五寸」が三層、柱や内法長押が書かれている部分が四層にあたる。しかし一層目の高さ2丈4尺1寸は、ほぼ7.3メートルになり、これを1階分の高さとするにはあまりにも高すぎる。ちなみに現存する天守の1階の高さをみると、丸岡城が9.51尺、松本城が11.28尺、姫路城が12.765尺で、10尺～12尺の例が多く、最高でも彦根城の15.54尺である(注4)。また特に初期の天守では、大きな屋根をもつ下層に複数の階を設けるために外観の層数と内部の階数が一致しないことが多い。こうしたことを考え合わせると、この天守でも2丈4尺1寸の高さをもつ一層目の部分には2階分の床が設けられていた可能性が強い。したがってこの天守は一見したところ4階にみえるが、内部は5階からなっていたとみるのが妥当である。

## 4) 天守の高さ

前述したように妻図、平図ともに天守の総高さを示すものと考えられる「高拾五間 是(尺)拾丈五尺(也)」の記述がある。しかし上記の各層の高さや図中に書かれている上下方向の寸法を合わせると6丈9尺4寸にしかない。このほか最上層の屋根は勾配が「七寸五分」であるから、棟までの高さはほぼ15.375尺になる(注5)が、これを加えても8丈5尺余、さらに鯨の高さは通常1丈～1丈5尺であり(注6)、これも含めると約10丈となるが、まだ5尺ほど合わない。したがって図中の寸法をみる限り、10丈5尺という高さは得られない。ただし1間＝7尺が1間＝6.5尺の間違いと仮定すれば、総高さは9丈7尺5寸となり、鯨までの高さに近似してくる。

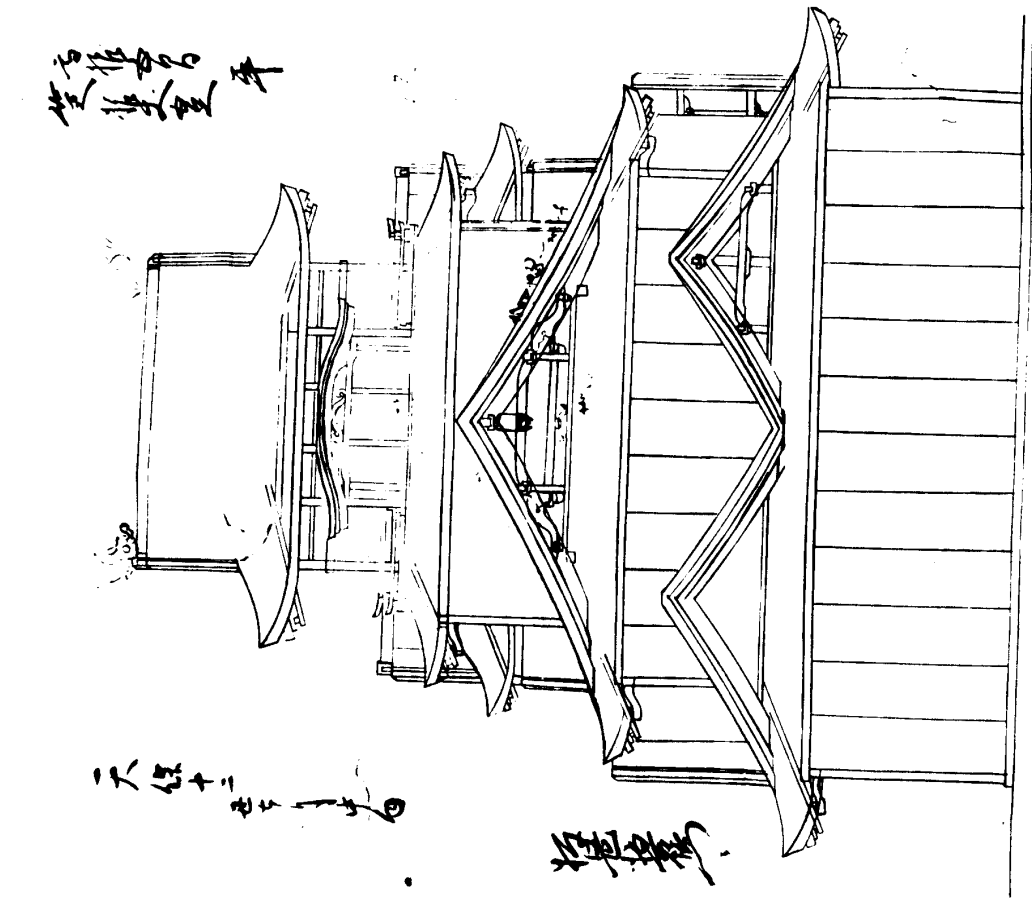


図-2 「平図」 (三田村家蔵『天守図』)

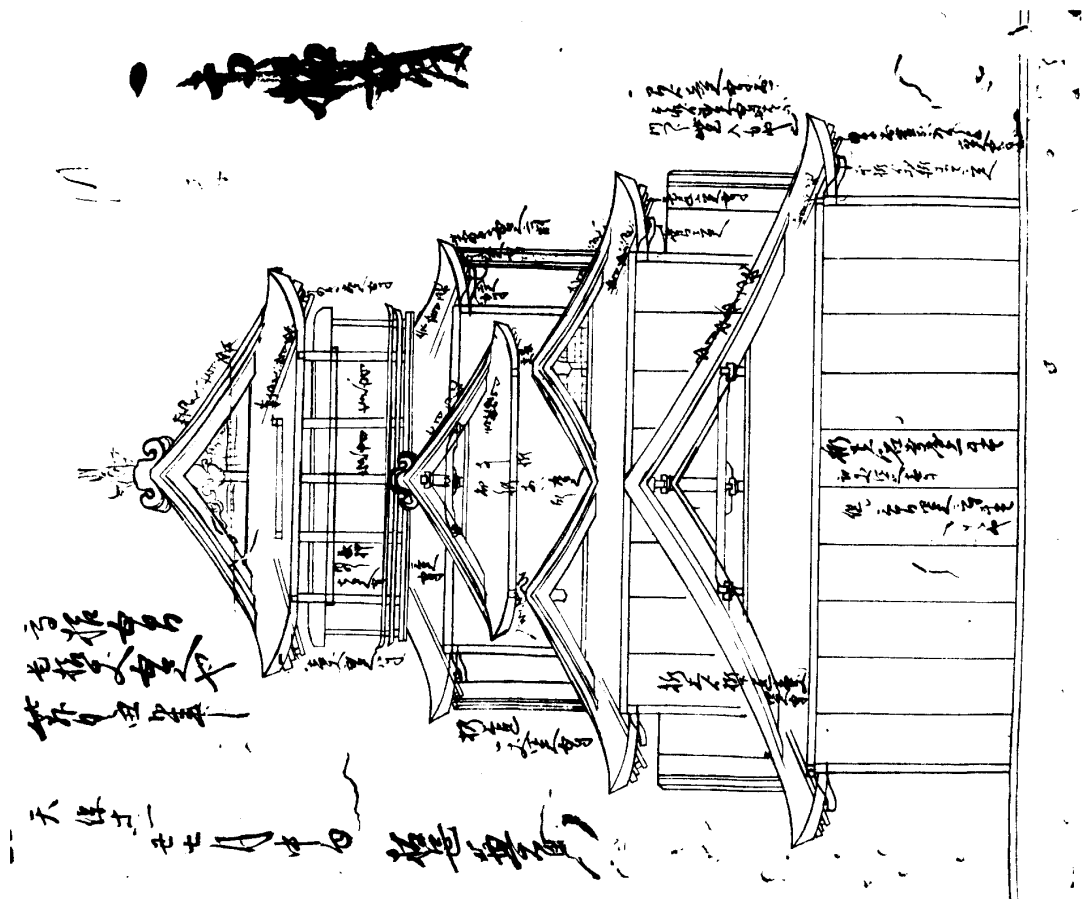


図-1 「妻図」 (三田村家蔵『天守図』)

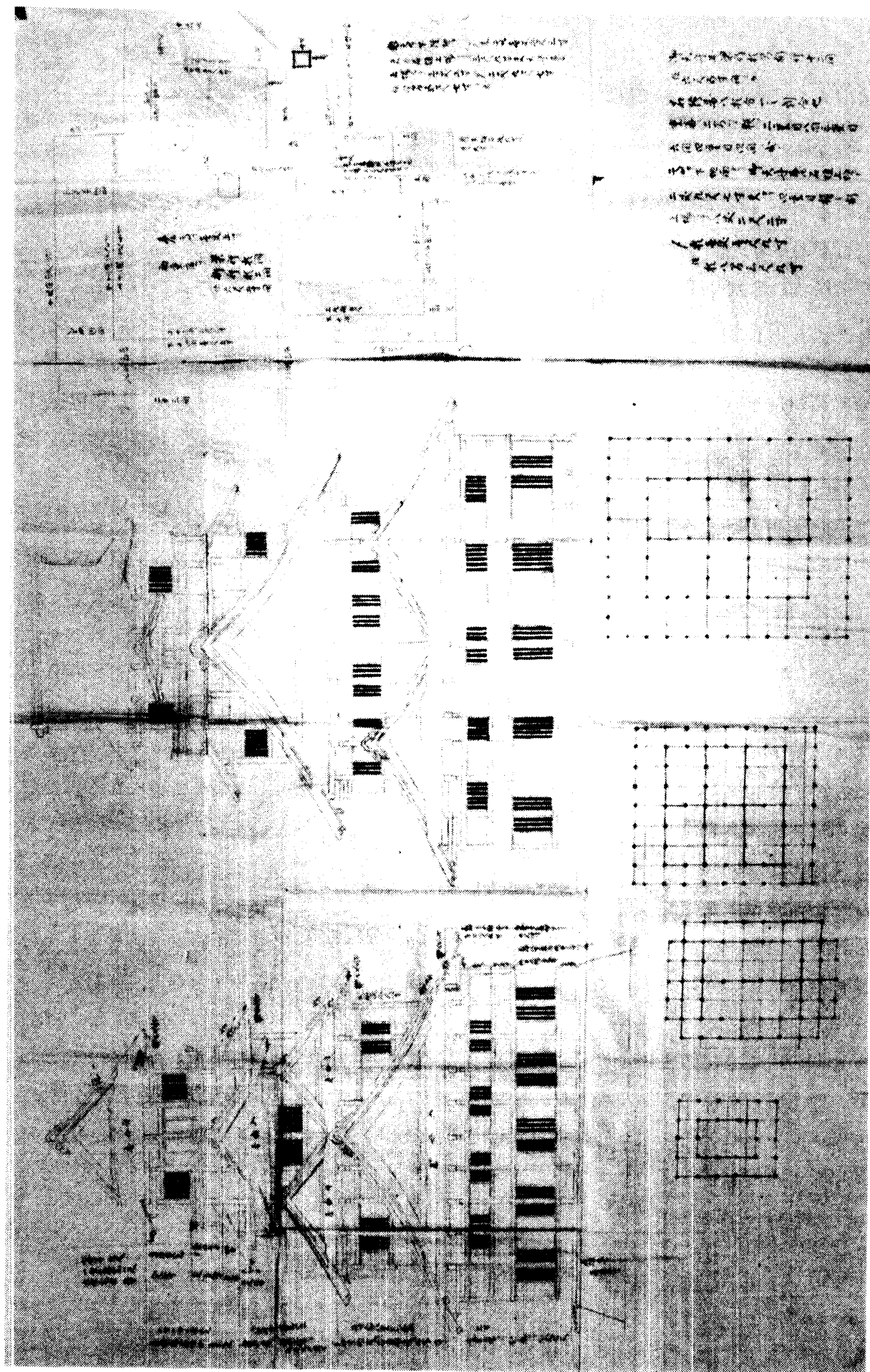


図-3 『福井城天守絵図』 (松平宗紀氏蔵・松平文庫・福井県立図書館保管)

このほか天守台(石垣)の高さが含まれていることも考えられるが、後述のように天守台の高さは不明である。いずれにしても「高拾五間 是(尺)拾丈五尺(也)」の記述は決め手に欠ける。ここでは各層の高さと最上層の屋根の高さを加えた、棟までの高さすなわちほぼ8丈5尺(約25メートル)をこの天守の総高さとしておきたい。

### 5) 平面の規模

前述したように一層目と二層目の外壁にみられる縦の線は柱を示していると考えられる。これをもとに各層の平面の大きさをみると、一層目が12間×10間(平×妻、以下同じ)、二層目が9間×8間、三層目が7間×6間、最上層の四層目が5間×4間となる。平の一層目から二層目は柱間が3間減少しているが、このほかはいずれも上層に進むにつれて2間ずつ遞減している。ところで図の柱間を計ると、1間はほぼ1.95～1.97センチメートルになっている。第2項で触れたようにこの図の縮尺はほぼ100分の1であるから、実際の1間は1.95～1.97メートル、尺に直せば6尺4寸4分～6尺5寸になる。同じ1間の長さにややバラツキがみられるが、基準寸法は完数が使用されたと考えられる。そして、妻図をみると、最上階の中央の柱間に「六尺五寸」とあることから、この天守は1間＝6尺5寸を基準寸法としていたと考えるのが自然であろう。なお最上階の中の間だけに「六尺五寸」と記されているのは、両端の間に「七尺五寸」という異なる寸法を用いたためと考えたい。

### 6) 天守台について

近世の天守は石垣で積まれた天守台の上に建つのが一般的である。この図には天守台がみられず、この天守はあたかも平地に建っているようにも思われる。しかし妻図の一層目の高さを示す記述の中に「桁下<sup>・</sup>石寄臺上<sup>・</sup>まで……」とある。この石寄台は“石を寄せて作った台”すなわち石垣積みの天守台と解釈できる。したがってこの天守も天守台をもっていたことになる。ただし天守台の高さや大きさなどは明らかにし得ない。

### 7) 天守の形態的特徴

以上、三田村家蔵『天守図』にみられる天守の建築的形態をみてきた。この天守は2つの大きな入母屋屋根を直交させた檼の上に、2重の望楼部を乗せ、それに入母屋の破風や唐破風をつけて装飾性に富む四重の外観を呈している。そして最上階は住宅風の意匠がうかがえ、回縁をもつ近世初期の天守にみられる形態を留めている。このほか内部は5階からなり、一層目(1・2階)が12間×10間の大きさで、上層に行くにしたがって、妻、平ともに1例を除き、柱間を2間ずつ遞減させ、最上層(5階)で5間×4間になること、天守の高さは最上層の棟までほぼ8丈5尺余、すなわち25メートルほどであったと想定できること、柱間寸法は1間＝6尺5寸を基準として計画されていたとみられること、ほかの天守と同じように天守台を備えていたことなどが指摘できる。

#### 4. 福井城天守との比較・検討

##### 1) 『福井城天守絵図』について

前掲の図－3は松平宗紀氏所蔵『福井城天守絵図』（松平文庫・福井県立図書館保管）である。たて62センチメートル，横99センチメートルの和紙に，天守の立面図が2図（縮尺80分の1）と一～四層の各平面図4図および天守台の形状が描かれている。表題はないが，福井藩主松平家に伝わっていることや右上方に描かれている天守台の形からみて，これが福井城天守の図であることは疑いない。福井城天守は慶長6年～同11年（1601～06）に結城秀康によって築城された後，寛文9年（1669）の大火で焼失，それ以後は再建されなかった。しかし，この図の天守は万治年間（1658～60）の福井城下図（注7）にみられる天守と同じような屋根構成をもっていて，寛文の焼失以前，さらにさかのぼれば結城秀康が築いた創建当初の福井城天守の姿を示しているとみなすことも可能である（注8）。

##### 2) 二つの天守の比較

三田村家蔵『天守図』の天守とこの福井城天守を比較すると，外壁の窓など細部の表現は別としても，全体の形はきわめて似通っていることに気付く。三田村家蔵の妻図（図－1）に対応するのが，図－3の左側の立面図であるが，とくに屋根の構成をみると，ともに一重目に大きな入母屋の屋根があり，その上に3つの小さな入母屋の破風（『福井城天守絵図』では下の2つに「付入母屋」，1つに「入母屋」とある）を上下2列に配している。また平図（図－2）とそれに対応する右側の立面図（図－3）を比べると，一重目は2つの小さな入母屋破風が横に並び，その上に二重目にあたる大きな入母屋破風がみえ，さらにその上に唐破風が付いていることまで合致している。つまり両天守の屋根構成は瓜二つといえる。

また福井城天守の各層の規模は，一層目が桁行12間（妻図に対応，以下同）・梁行10間（平図に対応，以下同），二層目が桁行9間（両端の半間ずつの破風部分を含む）・梁行8間，三層目が桁行7間・梁行6間，最上層の四層目が桁行5間・梁行4間であり，これも先に述べた三田村家蔵『天守図』と一致している。そして最上階に回縁がみられることも両天守に共通している。さらに『福井城天守絵図』において，平面図は一層目から四層目までの4図が示されているだけであるが，一層目の高さはやはり2丈4尺もあり，この部分には2階分がとられ，内部はやはり5階からなっていたと考えられることも同じである。一層目に2階分とられていたことは，『福井城天守絵図』において一層目の格子窓が上下2列に設けられていることからもうかがえる。さらに『福井城天守絵図』には図中に「但六尺五寸間二而」との注記があり，1間＝6尺5寸を基準として計画されたことが明らかである（注9）。三田村家蔵の『天守図』の天守も1間＝6尺5寸を基準にしていたと考えられることはすでに指摘した通りである。

このように三田村家蔵の『天守図』と『福井城天守絵図』にみられる二つの天守の形態はきわめて似通っていることがわかる。

しかしながら両天守はまったく同じというわけではなく，相異点もいくつか認められる。たと

えば天守の象徴ともいえる鯨は三田村家蔵『天守図』に描かれているが、『福井城天守絵図』にはない。逆に『福井城天守絵図』の天守は天守台があり、外壁も狭間（格子窓）などが詳細に書かれているのに対し、三田村家蔵『天守図』の場合は天守台がみられず、外壁も最上階のほかは柱が単線で示されているに過ぎない。ただしこれらは両図の精度の違いによるものとみることもでき、一概に両天守の相異点と即断することは危険であろう。

ところが図の寸法の書き込みから、各層の高さや屋根勾配、軒の出の長さをみると、二つの天守は微妙に違っている。表－1、2、3はこれを比較して示したものである。

表－1 各層の高さ

	三田村家蔵『天守図』	『福井城天守絵図』
一層	(石寄台上～初重桁下) 2丈4尺1寸	(土台上～初重桁上) 2丈4尺
二層	(初重桁下～二重桁上) 1丈4尺5寸	(初重桁上～二重桁上) 2丈7寸
三層	(二重桁上～三重桁上) 1丈4尺5寸	(二重桁上～三重桁上) 1丈9尺5寸
四層	(三重桁上～四重桁上) 1丈6尺3寸 (含屋根厚3尺5寸)	(三重桁上～四重桁上) 1丈7尺
計	6丈9尺4寸	8丈2尺2寸

表－2 屋根勾配

	三田村家蔵『天守図』	『福井城天守絵図』
初重	5寸5分	6寸5分
二重	6寸	6寸
三重	5寸	5寸
四重	7寸5分	8寸

表－3 軒の出

	三田村家蔵『天守図』	『福井城天守絵図』
初重	6尺5寸	6尺3寸
二重	6尺5寸	6尺3寸
三重	5尺	5尺5寸
四重	6尺5寸	6尺5寸

このような寸法の違いは誤記でない限り、明確な相異点として指摘できる。まず各層の高さについてみると、一層目は三田村家蔵『天守図』が2丈4尺1寸、『福井城天守絵図』が2丈4尺で、その差はわずか1寸に過ぎないが、二層目と三層目は福井城天守の方がそれぞれ6尺2寸、5尺



も高く、四層目もわずか7寸ではあるが、高くなっている。したがって四層目までの高さも福井城天守の8丈2尺2寸に対して、三田村家蔵『天守図』は6丈9尺4寸で、1丈2尺8寸(約3.88メートル)ほど違っている。前述のように二つの天守の平面規模は同じで、1間の基準寸法も同じく6尺5寸とみられることから、三田村家蔵『天守図』の天守は福井城天守に比べて、ずんぐりした形態をしていることになる。

つぎに屋根の勾配をみると、二重目、三重目はそれぞれ6寸と5寸で、二つの天守は同じであるが、初重と四重はそれぞれ1寸と5分づつ違い、福井城天守の方が急勾配になっている。また軒の出は、四重目はともに6尺5寸で等しいが、初重・二重目は三田村家蔵『天守図』の6尺5寸に対して、福井城天守が6尺3寸で、三田村家蔵『天守図』の方が2寸だけ軒が深く、三重目は逆に福井城天守の方が5寸深くなっている。

### 3) 三田村家蔵『天守図』と福井城天守の関連

以上、三田村久治家蔵『天守図』と松平文庫蔵『福井城天守絵図』の二つの天守を比較・検討してきたが、両天守は屋根の構成、内部の階数、各層の平面規模などがきわめて似通っていること、しかし各層の高さや屋根勾配、軒の出などの寸法には微妙な相違が認められることなどが指摘できた。

これらのことだけで三田村家蔵『天守図』がつくられた背景を即断することは危険であるが、あるいは福井城天守の屋根構成や平面規模などをそのまま採り入れながらも、各層の高さや屋根の勾配、軒の出の長さなど、細部寸法は福井城天守のそれに固襲することなく、独自に決めたともみられるであろう。ただし福井城天守は寛文9年(1669)に焼失してしまい、天保12年(1841)時には実在していない。したがってこの図は当時、なんらかのかたちで伝わっていた福井城天守の絵図や資料を参考にして作られたものとみてよい(注10)。

## 5. おわりに

鯖江藩主8代の間部詮勝は、天保11年(1840)4月28日に幕府から築城の許可を得て早速その準備に取り掛かった。この経緯については稿を改めて報告するが、数葉の縄張図が現存している(注11)ことや旧領内の数カ村に城普請のための材木改帳(天保11年8月付)が残されている(注12)ことから確かめられる。こうした状況を考え合わせると、三田村家から発見されたこの『天守図』も鯖江城の築城に伴って作成された一連のものとみることにはほぼ間違いなかろう。しかし以上の考察から明らかなように、この図にみられる天守の建築的形態は、細部の寸法こそ違うものの、福井城のそれにきわめて似通っている。しかもその形態は下層の大きな屋根をもつ櫓のうえに望楼を乗せ、最上階を住宅風とし、その周囲に縁を回すという近世初期の天守の様相を呈している。ところが幕末期の天守は、たとえば弘前城天守にみるように、寄棟屋根を重ねて各層を構成するだけで外観の装飾性は乏しく、最上階も特に住宅風の意匠を持つことはない。こうした天守の時代的変遷を考慮すると、三田村家蔵『天守図』は鯖江城天守の実施案としてではなく、準備段階での参考案として作成されたものとみるのが穏当であろう。

◆ 謝 辞

三田村久治氏、福井県立図書館および同館舟沢茂樹氏には図面撮影の御協力を得るとともに多大の御教示を賜った。末尾ながら深く感謝申し上げる次第である。

(注)

- 1) 『誠照寺史』(昭和45年)、文政10年(1827)5月20日付の契約書に「大工之事小野谷惣右衛門へ相渡候儀、一統別心無御座候事」とある。および同寺所蔵の鐘樓の棟札写(弘化3年9月付け)による。
- 2) 『福井新聞』昭和63年6月29日付
- 3) あるいは丸岡城天守のように石瓦が葺かれていたかも知れない。
- 4) 『日本建築史基礎資料集成14 城郭Ⅰ』中央公論美術出版(昭和58年)に掲載されている各天守の図面より求めた。
- 5) 軒の出(6尺5寸)と二つの柱間寸法(7尺5寸と6尺5寸)を加えた値に勾配(7寸5分)を乗じて求めた。
- 6) 注4と同じ
- 7) 松平宗紀氏蔵(松平文庫・福井県立図書館保管)
- 8) 『福井市史 資料編別巻 絵図・地図』(平成元年3月)の城郭図・屋敷図の項参照
- 9) 最上階の両脇の二つの柱間が、三田村家蔵『天守図』と同じように7尺5寸であったかどうかわからない。
- 10) 本稿の『福井城天守絵図』は縮尺80分の1であり、この絵図を直写したのではなかろう。
- 11) 鯖江市立資料館ならびに田代清痴家(鯖江市)などに縄張の写図が所蔵されている。
- 12) 土蔵市右衛門家(大野市稲郷)や赤谷吉左衛門家(今立郡池田町)などに所蔵されている。これらの文書の閲覧については福井県史編纂課の加藤守男氏の御厚意を得た。記して感謝申し上げます。